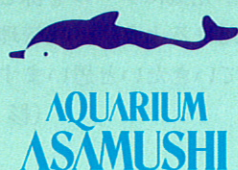


海・川・湖その世界とのふれあい

# マリンズノー

## MARINE SNOW

No. **17**  
1996. 3. 15



### ●目次

仔イルカの移動と命名 …… 1	トピックス …… 4
コツメカワウソ 搬入始末記 …… 2	催し物 …… 5
寒月とともにきた珍客 八戸港のセミイルカ達 …… 3	浅虫の海の生物たち (17) …… 6
マダラ今昔 …… 3	浅虫水族館日誌抄録 …… 6
	動物紳士録 …… 7

## 仔イルカの移動と命名

仔イルカ2頭が誕生してから昨年の夏で早くも2年が過ぎました。この間、大きなトラブルもなく、仔イルカ達は順調に成長し、体長は240cmを超え、体重も160kg余りと、親イルカと並んでいる時こそ小さく見えるものの、仔イルカだけを見ると、もう立派な一人前(?)のイルカです。

これまでの飼育プールはトレーニングプールで、一般のお客様は、仔イルカ達を見ることは出来ませんでした。新聞やテレビのニュース等で、当館で仔イルカが生まれたことを知って訪れるお客様からも、「仔イルカはどこに行けば見られるのですか。?」との問い合わせも多く聞かれました。

そこで仔イルカも生後2年を過ぎ、そろそろ母親と離しても良い時期になっているため、一昨年完成した『いるか館』(詳しくはマリンスノーNo.16を御覧下さい。)に、2頭の仔イルカを移動させることになりました。

仔イルカ達の移動は、10月2日におこなわれました。これまで『いるか館』には、ショーから引退した「マリン」と、『いるか館』のオープンに合わせて搬入された、No.18とNo.19の計3頭のイルカが飼育されていました。No.18とNo.19は、ショーデビューへ向けての訓練が始まっており、この2頭をトレーニングプールへ移し、代わりに2頭の仔イルカが『いるか館』へ入れられました。移動は、母親の妨害もほとんどなく、非常にスムーズにおこなわれました。ただこれから気掛りなのは、完全に別離されてしまった仔、母親それぞれがストレスを受け、異常な行動や摂餌不良に落ち入らないか、また仔イルカが多くの人達に、プールの上やアクリル面から見られるという初めての体験にどのような反応を示すのかなど、不安なことだらけです。しかし、うれしいことにその心配も私達の取り越し苦労に終わりました。

『いるか館』にデビューした仔イルカ達もいつまでも名前がないままではかわいそうです。そこで、浅虫生まれということから、地元の小学生の皆さんに名前を付けてもらうことになりました。さまざまな名前の中から、テラの子供は『ルル』、ローラの子供は『サーラ』とそれぞれ命名されました。



「ルル」性格はおとなしく、やや警戒心が強い。  
メス 体長 250cm 体重 165Kg (96.2.7測定)



「サーラ」性格はおてんばで、好奇心旺盛。  
メス 体長 246cm 体重 165Kg (96.2.7測定)



同居中の「マリン」

まだまだ子供っぽさのぬけない2頭ですが、ゆくゆくは2頭そろってのイルカショーデビューを目指しての訓練が始められることでしょう。これからも、2頭の仔イルカが元気にプールを泳ぎ回る姿を皆さんに見ただけのよう、健康管理に十分注意を払って飼育していきたいと思えます。

(杉本)

## コツメカワウソ搬入始末記

1995年7月25日、神奈川県藤沢市にある江ノ島水族館からコツメカワウソの雄1頭が送られてきました。当館ではこれまでも雄2頭・雌3頭の計5頭を飼育しており、雄雌1頭づつをペアにして、2組（ゴンタとキキ、トムとモモ）を展示し、残りの雌1頭（ナナ）を別の飼育室で飼育していました。展示中のペア達は、時折繁殖行動が見られるものの、なかなか繁殖が成功しません。そこで単独飼育中のナナになんとか「お婿さん」とを考えていたところ、江ノ島水族館から若い雄1頭をわけていただくことになりました。

この個体は1993年4月に高知県のいぢ動物公園で生まれたシンという個体で、繁殖個体交換により江ノ島水族館で飼育されていたものです。

羽田空港から空輸されたシンは、夕方5時頃には当館に到着、さっそくナナの待つオリへ収容することになりました。オリは2.5m×2.5m程の広さですが、相性をみるために、中央を金網で仕切り、金網越しに対面させることにしました。



輸送コンテナごとオリの中に運び込み、まずは一安心。コンテナの扉を開けましたが、少し顔を出してあたりをうかがうと中に隠れてしまいます。コンテナを傾けても足をふんばって出ようとしません。そこで少々乱暴ですが、コンテナを逆さにして振ると、さすがのシンもたまらずオリの床に転がり出ました。空のコンテナを運び出そうとしたその瞬間「あっ、逃げた！」の大声に、見るとオリの外を黒いかたまりが走り回っています。

オリのある場所は少し広い部屋ですが、扉は全てロックしてあるので心配はありません。簡単に

捕まるだろうと思っていると、貯水タンクの下に潜り込んでしまったからさあ大変！。タンクの下は「縁の下」のような構造ですが、15cm程の隙間があるだけで、手を入れるのがやっとです。係員3名でまわりを取り囲み、棒や柄付きブラシで追い出そうとするのですが、一向に出る気配がありません。ならば餌で釣り出してやろうと試すと、やはり食欲には勝てないらしく、少し顔を出します。「これだ！」と思いきや誘いをかけた瞬間、うかつにも餌だけ取られてしまったのです。タンクの下からはガリガリ、ムシャムシャという音だけが聞こえてきます。背中に刺さる同僚の冷めたい視線を感じながら、時計を見ると、7時を過ぎています。シンはタンクの下が気に入ったらしく、すっかりくつろいでいる様子でした。逃げられてから2時間以上経過しています、このままではいけないと気を取り直し、再びタンクの下で棒を振り回しました。その度に、シンも右へ左へ逃げ回ります。こちらも休まず続けます。棒を握る手はコンクリートに擦れてあちこち血が滲んでいますが、シンもだいぶ追いつめられたのか、時折外に出そうな素振を見せます。ここで休む訳には行きません。5分・10分…と時間が過ぎ、そろそろ体力も限界に近づいた頃です、ついにシンが飛び出しました。「出たっ！」「どこ行った？」あらかじめタンクの側に置いた輸送コンテナの中の麻袋に潜り込んだようです。すぐにコンテナの扉を閉じ、そのままオリの中に運びました。

オリの扉を閉めた時、時計は7時45分を指していました。捕獲に要した時間は2時間45分、全員くたくたに疲れていました。「本当に麻袋の中に入ってたんだろうね…？」「入ったと思いますけど…どうだか？」

ほっとしたのも束の間、急に不安になり、再びオリに入りコンテナをゆすると、確かに麻袋の中に動くものがあります。今度こそ逃げられないように用心してオリを閉じ、大捕物もようやく終了。

シンも翌日にはコンテナから出て、ナナとのお見合もうまく行きました。あとはうまく繁殖に成功することを願うだけです。（阿部）

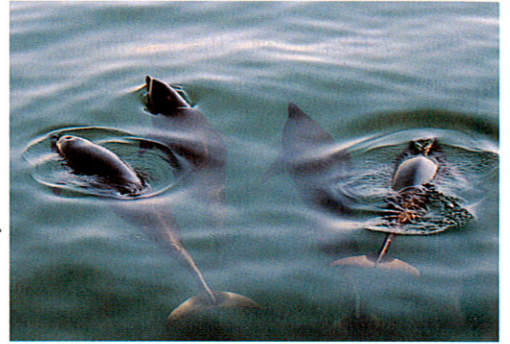
## 『寒月とともにきた珍客、八戸港のセミイルカ達』

1993年師走、当時青森県水産試験場勤務であった私は、八戸港付近の造船所に連日泊まり込みで、新調査船「開運丸」の建造に没頭していた。その後水族館勤務となっていた私の元に、その八戸港から1995年12月20日早朝、緊急連絡が飛んできた。港内に4頭のイルカが迷い込み、水試調査船の周りを遊泳中との知らせである。開運丸無線局長からの電話によれば、イルカは体全体が黒色で背鰭が無く、細身で、かつ腹面に白色域が見られることなので、この特徴から、北太平洋域に生息するセミイルカと推定、可能な限りビデオに撮り、かつ十分に観察し、衰弱の予兆等について見逃さぬよう依頼した。

この情報は、当日の昼にはテレビニュースで全県下に流れ、午後からは、この八戸港始まって以来の珍客を一目見んものと、多数の市民が岸壁につめかけた。また、翌日からの地元紙に、「イルカ日誌」コーナーも特設され、微笑ましい記事の連載が始まり、このセミイルカ達は、たちまち、八戸市民のアイドル化していった。

しかし、この騒ぎもわずか3日限り、12月23日イルカ達は、クリスマスイブを広い外洋で過ごす目論みか、それとも、空腹に悲鳴を上げてか…、まるでファンタジー映画のエンディングのように八戸港からぷつりと姿を消した。

12月27日、開運丸からは、乗務員が3日間にわたって撮影したビデオが館に到着したが、映像はとてもきれいで、貴重な資料となるものである。さて、かのセミイルカ達は、今宵、いずこの海で寒月をご覧であろうか。  
(館長 佐藤立治)



▲八戸港内で遊泳中のセミイルカ達

写真提供：青森県水産事務所

## 『マダラ今昔』

北国の人々にとって、マダラは最も馴染みのある魚の一つです。無駄なところのない魚で、ジャッパ汁の鍋料理をはじめ、様々な調理法で賞味されております。『鯉腹喰らう』の言葉どおり、大きな口で手当たり次第何でも食べる大食漢ですが、下顎から伸びる一本の髭等、よく見ればなかなか愛嬌のある顔をしております。当館のマダラ達は、オオカミウオ・ケムシカジカ等と共に展示され、観客の人気を集めております。青森県の脇野沢村は、産卵場として有名なところで、1月～2月頃にかけて産卵が行われます。ふ化した仔魚は道東方面へ回遊し、3～4年かけて全長70～80cm・体重5～6kgにもなる立派な親魚に成長して、とりわけ雌は数にして250～300万粒・体重の2/5を占めるほどの卵をお腹に抱えて、再び脇野沢へと帰ってきます。マダラ魚の記録は、藩政時代にまで遡る事が出来ません。しかし、紀州のミカン船が江戸で大儲けした話があまりに有名なのに対し、丁度同じ頃腹一杯に塩詰めたマダラを江戸へ運んだ話は一般に殆ど知られておりません。かつてどれ程大漁であったか、判りやすい記録を拾うと、昭和八年頃約3万トンとあります。昭和九年、脇野沢村は大火に見舞われますが、翌十年には『タラ道路』と称する舗装道路が誕生、タラ御殿が立ち並んだとされております。又、戦時中には国に戦闘機を献上する程であった等、タラ漁が盛んだった頃の話も残っております。しかし最近では、平成元年度1,750トン、その後は下降線を辿り、平成6年度は僅か100トン程度まで落ち込んでおります。

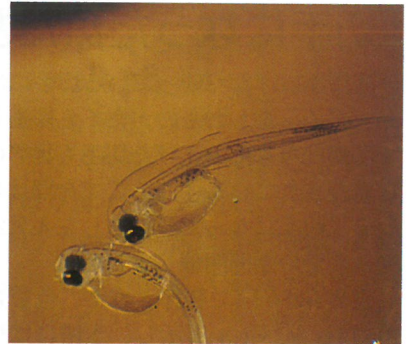
『夢よもう一度』と研究機関、漁協では、人工孵化放流・受精卵放流等を行っております。いろいろと不漁の原因も取り沙汰されますが、誰にも真相は解りません。水槽を泳ぐマダラ達も、心なしか寂しそうに見受けられる今日この頃です。  
(佐藤 敦)



## ホッキョクダラの繁殖

当館では北海道大学水産学部の協力を得て、1991年の夏から北極の流氷の海に生息するホッキョクダラを飼育展示していますが(詳しくは、マリンスノーNo.14参照)、このたび繁殖に成功しましたので報告します。1995年3月9日、成熟したメス1尾(体長280mm)より卵をしぼり、オス(体長188mm)より採取した精液を振りかけて受精卵を得ました。卵は分離浮性卵で、卵径は約1.5mmでした。この受精卵約2000粒を海水の入ったビーカーに分散していれ、低温恒温器に収容。恒温器内の温度は2.0℃を維持。受精後46日目の4月23日から、ふ化が始まり、50日目頃までにはほとんどの卵から全長

6mmほどの仔魚が生まれました。この仔魚たちに動物性プランクトンなどのエサを与えて育成した結果、現在でも9尾が生き残り、全長も80mmほどになって順調に生育しています。



(神)

## フンボルトペンギン続々誕生

フンボルトペンギンは南アメリカのペルー、チリの沿岸やその周辺の島々に生息するペンギンで国内の動物園、水族館で多く飼育されています。当館では1984年から飼育を始め、1992年3月に初めてヒナがふ化し、その後も順調に繁殖しています。

これまでの繁殖をみても、繁殖期は秋から春にかけてで、2個の卵を産み、オスとメスが交代で卵を温め、40～47日でふ化しています。今年(1995)は、3月21日・10月30日・11月11日にそれぞれ1羽がふ化しました。

ふ化したヒナは親鳥に餌をねだり「ビービー」と大きな声で鳴き叫ぶので展示室はとてにぎやか

でした。

ふ化後、2カ月ほどすぎるとそれぞれまで全身を覆っていた綿羽が抜け落ちペンギンらしくなり、体も親と変わらないほど、大きくなりました。あともう少しで餌も自分で食べられるようになり、無事に巣立ちすることが出来ると思います。これで当館で誕生した二世は8羽となり、今では合計14羽のフンボルトペンギンを飼育しています。



(楠引)

## 新イルカショー『水の惑星』

平成7年7月22日から「水の惑星」と題した新しいイルカショーが、スタートしました。

今回のショーは、遠い宇宙から地球を訪れた観客に、生物の進化・人間とイルカの共通点や違いを紹介するという設定で、これまでのショーに比べると、イルカの能力等に関する説明が多い構成となっています。当館のイルカショーは屋内で行っているため、音楽・照明によりイルカの動きや場面の展開を演出することが出来ます。明と暗・動と静をうまく使い分け、スピード感のあるショーを上演したいと心がけています。現在はメス2頭とオス3頭の、2チームが交代でショーを行っていま

すが、訓練中のイルカ達も加え、早いうちに3チームの体制を作る予定です。

1作目からのショーのタイトルを振り返ってみると、「青森の四季」「青い地球」「海」といったように自然や地球環境と人間との関わりを題材にしたものが多くなっています。

これは、イルカとの触れ合いを通じて、いろいろな環境問題に関心を持ち、地球の将来について考えてみようという、私達の一貫したテーマです。

(田村)



ショーを観てくれた子供達が、大人になる頃も、水の惑星が青く輝き続けていますように…。

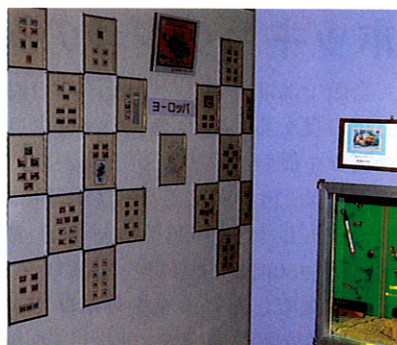
## 「切手になった魚たち」

普段なにげなく使っている切手には、いろいろなデザインをしたものがたくさんあります。そして図柄に魚を取り上げた切手も世界の多くの国から発行されています。そこで今回は春の特別展として「切手になった魚たち」を4月29日から6月30日までの期間開催しました。

世界180カ国で発行された、色彩豊かな魚の切手819枚をパネル展示し、水槽には中国金魚をはじめ、ブルーの地に黄色の線が放射状に流れる「タテジマキンチャクダイ」や、水面から目玉を半分出しながら漂う世界七珍魚のひとつ「ヨツメウオ」等を展示しました。

今回は、あくまでも切手が主役ということで、切手収集に興味のあるお客様が足を止めては、熱心に見ていらっしゃるようでした。最後にご多忙にもかかわらず、協力して頂いた志摩マリランドの皆様へ深く感謝いたします。

(工藤)



## 「魚の国の王様たち」

みなさんもトランプ(ゲーム)などでご存じの、キング(王様)・クイーン(女王様)・ロイヤル(王室)といった名前を持つ世界の魚たち18種135尾を集め、夏の特別展「魚の国の王様たち」を7月23日から8月20日まで開催しました。

名前が示すとおり、とても色彩の鮮やかな魚・深い落ち着きのある魚などがたくさん展示されました。そのなかでも、海水魚ではカリブ海の女王と呼ばれる「クイーン・エンゼル」、淡水魚では「レッドロイヤルブルー・ディスカス」などが、その美しさで見る人達を魅了していました。水槽のディスプレイはいろいろですが、オモチャのお城や宝

石等で飾り付けた水槽には、子供たちも足を止め歓声を上げていました。この魚たちも、現在では常設水槽に引越して、他の魚たちと仲良く泳いでいます。水族館へ来たなら、魚の王様たちを捜してみてください。

(小山内)



## 「動物愛護フェスティバル」

平成7年10月28日(土)、青森県動物愛護フェスティバルが浅虫水族館を会場に開催されました。

この催しは、青森県と青森県獣医師会が主催し、浅虫水族館の共催で開催されたものです。

当日は、朝早くから沢山の人が会場を訪れました。メイン会場となったショーホールでは、フェスティバルの開会に先立ち、青森県動物愛護協会の設立総会が開かれ、会場一杯につめかけた動物愛好家たちの満場一致で、青森県動物愛護協会が設立されました。このあと、「ぬいぐるみショー」や「犬のしつけ方教室」「ペット写真コンテスト」・「動物ふれあいコーナー」など、盛り沢山のプログ

ラムでフェスティバルが行われました。またシンポジウムでは、日本動物愛護協会の会田保彦さんが「動物愛護とは何だろう」、女優の松島トモ子さんが「動物と私」と題してそれぞれ講演され、動物愛護に対する思いを一層深くする一日となりました。

(小笠原)



写真提供：青森保健所

## (17) トゲクリガニ

*Telmessus acutidens*

トゲクリガニは、水深30mくらいまでの砂泥底に生息するやや大型の寒海性のカニで、太平洋側では室蘭から東京湾まで、日本海側では樺太南部から朝鮮東岸まで分布します。甲羅が栗の実のような形をしており、背面には無数のトゲや短い毛が生えていることからトゲクリガニと呼ばれます。甲長8cm、甲幅10cmくらいになり、甲羅の側縁には鋸歯状の大きな突起があります。

陸奥湾では11月下旬から7月頃にかけて漁獲され、一般には「ケガニ」と呼ばれていますが、北海道で漁獲されている本当のケガニとは別種です。しかしケガニとは近い関係にあり、食用種としても同様に重視されます。青森での水揚げのピークは4月から5月の桜の季節で、花見の席に欠かせないものになっています。トゲクリガニは冬の間脱皮し、一回り大きくなった後に交尾をします。そして5月頃の産卵まで餌をたくさん食べるので春のカニには身がいっぱい詰まっています、桜の時



期に旬をむかえます。

当館では他の生き物と一緒にタッチコーナーで展示しています。餌は主にアサリやホッケの切り身等を与えています。いつも岩の下や隙間に隠れ、じっとしているため、なかなか探すことは難しいようですが、餌を与える時には元気に歩き回り、大きなハサミ脚を振り上げ、まるで餌を催促しているようにも見えます。

みなさんも水族館に来て、生きているトゲクリガニをぜひ見て下さい。なにか新しい発見があるかも… (野澤)

## 浅虫水族館日誌抄録

1. 1 新春企画「ニューイヤースペシャル」開催 (～1/8)
  - 1 「水族館★スタ展」(～2/12)
  - 6 よみうり水族館より、オウムガイ他搬入
  - 9 サンシャイン水族館より、デンキウナギ他搬入
  - 10 佐井村牛滝支所より、チョウザメ搬入
2. 10 「青森冬祭り」浅虫会場；協賛 (～2/12)
  - 15 青森・福岡直行便就航記念生物交換 (海の中道)
3. 9 ホッキョクダラ人工受精
  - 21 フンボルトペンギン孵化
  - 25 新入学企画「水族館・春うらら」開催 (～4/2)
  - 26 油壺マリパークより、タカシガニ・マツカサガニ他搬入
  - 30 北海道臼尻より、サケビクニン他搬入
4. 9 大戸瀬漁協より、チョウザメ搬入
  - 20 庄内浜加茂水族館へ、イトウ搬出
  - 22 和歌山県立自然博物館より、ウミシダ搬入
  - 29 入館者400万人達成記念セレモニー
  - 29 春の特別展「切手になった魚たち」(～6/30)
5. 14 「'95 ワイワイアイランド 湯の島」；協賛
6. 14 油壺マリパークへ、オオカミウオ他搬出
  6. 23 下関水族館より、カブトガニ搬入
  7. 20 新アシカショー「めざせ宇宙飛行士」開始
    - 22 新イルカショー「水の惑星」開始
    - 22 室蘭水族館へ、マダイ他搬出
  7. 23 夏の特別展「魚の国の王様たち」(～8/20)
    - 25 江ノ島水族館より、コツメカワウソ搬入
    - 26 下関水族館へ、イシナギ他搬出
  9. 23 「ふれあい水族館」開催 (～9/26)
  10. 3 碧南水族館より、サカサクラゲ搬入
    - 7 江ノ島水族館へ、フンボルトペンギン搬出
    - 12 仔イルカ「いるか館」へ移動
    - 14 「第10回浅虫水族館図画展」 (～11/30)
    - 19 アカウミガメ標識放流
    - 28 「動物愛護フェスティバル」開催
    - 30 フンボルトペンギン孵化
  11. 3 仔イルカ命名式
    - 3 「水族館祭り」開催 (～11/5)
    - 11 フンボルトペンギン孵化
    - 18 木村守男 新青森県知事来館

動物紳士録



●トビハゼ *Periophthalmus cantonensis* (Osbeck)

東京湾以南の南日本から沖縄・朝鮮半島・中国などに分布するハゼの仲間で、主に内湾や河口の干潟に生息しています。目は頭頂部に位置し突出しており、左右の腹ビレは吸盤と移動の役目をします。餌の赤虫を石の上に置くと水中から上がりピョンピョン飛び跳ねるように移動しながら食べます。また、皮膚呼吸で空気中の酸素も利用できるため、長時間水に入らなくても平気です。

●イトウ *Hucho perryi*

来館者の多くが、「これがイトウか！」と足を止め、水槽をのぞき込みます。サケ・マスの仲間で、日本に生息する淡水魚のなかで最も大きくなり、その最大のもは全長2mを超えると云われます。

かつては青森県にも分布しましたが、現在では北海道の一部の河川や湖沼に生息するだけで、大きさも年々小型化しているとされます。このため釣り人達は、憧れを込めて「幻の魚」と呼びます。



●ウシガエル *Rana catesbeiana*

アメリカ合衆国南東部原産の大型種で、体長20cm位になります。食用として世界各地に移入され、日本では1919年以降に移入したものが拡がり、各地の池沼に生息しています。暖かい地方では生まれた年のうちに変態を終えますが、多くはオタマジャクシのまま越冬して蛙となります。眼の後ろの鼓膜が、オスでは眼の2倍位の大きさですが、メスは眼と同じ位なので、簡単に見分けられます。

表紙説明 ヨシノボリ (橙色型)

全国各地の湖沼・河川に生息しているハゼの仲間で、尾ビレに美しい橙色の斑紋があります。産卵は、オスが石の下に巣穴を掘り、そこにメスを迎え入れて行われます。成魚の全長は7cm位です。

マリンスノー No.17

1996年3月発行

(財)青森県企業公社

青森県営浅虫水族館

〒039-35 青森市浅虫字馬場山1の25

☎0177-52-3377